

## 本当の PECS (ペクス)

京都市児童福祉センター 門 眞一郎

TEACCH プログラムは、わが国では毀誉褒貶にさらされている。私は、とてもすぐれた包括的プログラムであると思っているが、世の中には、専門家と呼ばれる人たちの中にも、TEACCH をよく言わない人があちこちに存在する。そういう人たちは、たいてい TEACCH についてろくに学びもしないで、ケチをつける輩である。自分の不勉強、無理解を棚に上げて、難癖をつけるのである。私には、嫉妬深い狭量な人たちとしか思えない。嫉妬心ほど始末におえないものはない。Shit!!!

ところで、わが国で TEACCH を誤解し、見当違いの批判をする人たちに向けて、TEACCH とは何かということについて丁寧に説明した本を、TEACCH に関するわが国の第一人者の一人である内山登紀夫先生が最近上梓された。学研から出た『本当の TEACCH』である。これはとてもすぐれた本であり、できるだけ多くの人に是非読んでほしい本である（これは皮肉ではなく本心で言っているので誤解なきように）。よい本なのであるが、残念ながら PECS（絵カード交換式コミュニケーション・システム）についてお書きになっている箇所は、私には納得できないのである。すなわち、次の2箇所である。

まず、ショブラー先生へのインタビューの中で、《PECS との関係》という見出しのもとに、内山先生は「PECS と TEACCH の手法は似ているし、同じだと思っている人もいるようだ。TEACCH と PECS は同じなのか違うのかを聞いてみた。」と質問内容を説明し、その後にショブラー先生の返答を載せている。

「ボンディ〔PECSの開発者の一人、アンディ・ボンディのこと：引用者注〕はTEACCHで構造化された指導を学んだうえで、PECSを始めた。視覚支援を使うという点ではTEACCHとオーバーラップする部分が非常に多い。ただPECSがめざすのはコミュニケーションであり、絵カードの交換を重視する。TEACCHは広範囲のホリスティック（全体的）なアプローチを使う。私たちはコミュニケーションだけでなく、多くのほかの生活スキルに焦点をあてる。それがPECSとは大きく異なる点であろう。」(P.174-175)

次に、メジボフ教授へのインタビューでは、質問の形では書かれていないが《PECS/ユニバーサルデザイン》という見出しで、メジボフ教授の返答を載せている。

「PECSの考案者のボンディはノースカロライナの大学の出身で、長年にわたりTEACCHに詳しかった。彼がTEACCHの方法から影響を受けたことも考えられるし、TEACCHも確かにボンディの実績に影響を受けた。

PECSはTEACCHの視覚的な方法と彼のバックグラウンドであるABA〔応用行動分析：引用者注〕の考えから影響を受けた。しかし、TEACCHと違う点は、コミュニケーション

の領域のみに焦点を当てていることだ。ボンディ博士は TEACCH の視覚的支援の有効性について話していることが多いようだし、彼のシステムは非常に印象深く、効果的だ。TEACCH と PECS の間には多くの共通点があるが、PECS は長く複雑な文章を使うコミュニケーションを重視する傾向がある。それに比べて TEACCH は、他者に対して自分の要求を伝える能力が限定されている子どもが、自分の要求のエッセンスをコミュニケーションできることに焦点を当てている。

TEACCH も PECS も、とりわけことばを持たない人々に対する有効なコミュニケーションシステムを開発してきた。どちらも人と人の意思の交換という意味でのコミュニケーションに焦点をあて、自閉症の子どもが具体的で明白な意思の交換ができるようにしている。TEACCH も PECS もコミュニケーションを促進するために作られ、両方がそのゴールを効果的に達成している。(中略)

PECS やユニバーサルデザインは TEACCH が行っていることの一部分にのみ焦点をあてており、TEACCH はこの二つよりもずっと広範囲の包括的なアプローチであることは言うまでもない。」(P.182-183)

《構造化》は TEACCH プログラムの中で用いられる 1 つの技法である。しかし TEACCH プログラム自体は、単なる 1 つの技法ではなく、自閉症スペクトラムおよび関連するコミュニケーション障害の人への包括的な支援プログラムである。しかも、ノースカロライナ州全州にわたって提供される、いわば行政施策のようなものと私は理解している。だから「構造化 = TEACCH」ではないことは、論理的に考えればすぐにわかることである。

同様に PECS は、DAP (デラウェア州自閉症プログラム) の中で用いられる 1 つのトレーニング手順、すなわち 1 つの技法である。PECS は、コミュニケーション障害の人に自発的なコミュニケーションを教えるための指導手順である。しかし DAP 自体は、単なる 1 つの技法ではなく、教育上の分類が自閉症とされた子どもや青年(21 歳まで)のための教育プログラムである。これもデラウェア州全州にわたる教育施策である。

TEACCH の方が DAP よりも歴史が古いだけあって、支援範囲は確かに DAP よりも広いとは思いますが、アメリカ合州国における全州規模の自閉症支援プログラムとしては、TEACCH と DAP の 2 つしかない(らしい?)。

以上の図式から考えると、PECS と TEACCH とを同じ土俵で比較することが論理的でないことは明らかである。同じく、構造化と DAP とを比較するのも論理的ではない。比較したければ、DAP と TEACCH とを比較すべきであり、PECS と TEACCH とではない。

ついでに書くと、内山先生の PECS 理解が私には疑問に思える箇所がもう 1 つある。

「ブレスクールでは絵カードによるコミュニケーション指導をよくする。このような方法は

PECSと似ているが,TEACCH プログラムではPECSほど文法の正確さにこだわらない。」  
(P.52)

私の理解がまちがっていなければ,PECSは文法の正確さにこだわってはいないと思う。文法はどうでもいいと思っているわけではないだろうが,特別にこだわっているとは思えない。PECSがこだわるのは,「自発的に機能的コミュニケーションができるようになる」という点ではないかと私は思っている。

(2007.1.21記)